国際交流員パトリック・ルムラーの ドイツを語るパトリック

Vol.13 家庭ごみの分別

1907年、ベルリン市。市のごみ焼却施設が、年々増えているごみの量に追いつかない。ごみの量を少しでも減らそうとするベルリン市は、ごみの分別制度を導入し、市民にごみを生ごみなど、3つのごみ容器に分別するように知らせた。

103年後、現在でも家庭ごみが資源ごみをはじめ、古紙とそれ以外のごみというように、3つのごみ容器に分別されている。そのため、各世帯にごみ容器が置いてある。ごみの回収日に関係なく、好きなときにいつでもごみ容器にごみを入れてもいいが、ごみを分別する必要がある。黄色の容器には資源ごみ、青い容器には古紙、緑色（または茶色）の容器にはそれ以外のごみを入れる方針だが、多くの人は分別の仕方が分からない。

容器の使用説明書を見ると複雑過ぎ、消費者に分別の仕方を理解させるのが難しいとすぐ分かる。青い容器には古紙とダンボールしか入らなく、分かりやすいが、黄色の容器に入る資源ごみの分別の仕方には問題がある。例えば全く同じ資源材料で作られた包装紙や商品でも、同じ容器に入れてはいけないケースが多いので消費者が混乱する。それは、資源の種類ではなく、包装紙や商品の製造者がリサイクル料金を支払ったかどうかケースバイケースで確認し分別する必要があるからだ。

一般的に、どんな材料を使って、製造しても、製造者側が作った量に対してリサイクル料金を支払う必要がある。その代わりに料金が支払われたと分かるように商品や包装紙などに「緑色のドット」が付けられる（http://www.gruener-punkt.de/）。「緑色のドット」が付いていない資源ごみを黄色の容器に入れてはいけない。でも、ドットが付いている缶とプラスチック袋を、つまり金属とプラスチックという全く違う資源材料を同じ容器に入れないといけない。簡単に言うとドイツ人はごみの種類によって分別せず、料金が支払われたかどうかによって分別するのだ。言うまでもなく、「緑色のドット」がすべての資源ごみには確認できないので、すべてのごみの種類に対して、それぞれ料金が支払われたかどうか把握する消費者がこの世にいない。その結果、地方によって、黄色の容器の内容の5割が間違って捨てられている。もともと現在の分別の仕方でリサイクル可能の資源ごみの55%しかリサイクル施設に送られていない。ドイツの古いリサイクル制度を効率の高い、消費者が分かるような制度に変える必要がある。

リサイクリングがお金がかかる時代から儲かる時代に変わってきた。上記のリサイクル料金だけでなく、再利用できる資源を売ることで儲かる市町村が増えてきた。そのために、リサイクル率を増やし、新分別制度を導入する市が増えてきた。プラスチックをはじめ、鍋や缶のような金属品、資源ごみが含まれているドライヤーのような小さい電化製品などのほとんどの資源ごみ類を分別せずに黄色の容器に入れてもよくなったのはその新制度である。複雑なごみの分別の仕方がなくなった。ごみをほとんど分別しないので、ごみのすべてを同じ日に回収することができる。そのためにごみの収集回数と共に、市町村と消費者の費用負担が減る。でも、まだ僅かな数の市でしか導入されていない新制度の主な特徴は消費者ではなく、リサイクリング工場の労働者や機械がごみを分別することである。そのため、リサイクル率が上がり、前より効率の高い分別が実現できる。家庭ごみを100%リサイクルしない限り、ドイツは環境先進国と言ってはいけない時代がすでにはじまっている。

問い合わせ先　生活安全課　☎40-5555

平成22年度第2回学校適正配置検討委員会開催される

10月22日（金）午後6時から石橋庁舎において第2回目の検討委員会が開催されました。

今回は、9月に実施した学校適正配置に関する小中学校長アンケートの結果、市における小中一貫教育・学校選択制度・小規模特認校の現状や取組みについて報告がなされ、昨年、一般市民や保護者等を対象に実施したアンケート結果に基づく、市民と保護者が望む小中学校の適正規模と関連データの説明がありました。

また、学校適正規模等の具体的方策について案が提出され、その説明と次回の実質討議に向けての質疑応答がなされました。

●問い合わせ先
教育総務課
☎(52)1117